

〈書評：キューバ——体制移行への視角〉

## 騒々しい過去と向き合うこと

——ラファエル・ロハス『安眠できぬ死者たち』\*をめぐって——

久野量一

はじめに

2006年7月、革命体制はフィデル・カストロ後の時代に入った。島がフィデル個人の手を離れたというこの事実を慶賀すべきこととして受け止めるのか、あるいは深刻な事態として憂慮するのか、政治的な立場によって顔色は異なるが、では感情を抜きにしてその先のことを考えるとしたらどうだろう。今後、何らかの方法で、島の内外にいるキューバ人を主体にいま一度共同体を構築するとして、果たしてだれがその青写真を明確に描いているのだろうか。ひとしきり喜んだのち、あるいは悲しんだのち、結局、腕を組むのであれば、どちらの立場もともに、していること（あるいはしていないこと）に何の変わりもない。カストロ倒れるの報は、いままでに考えておいて当たり前だったはずのこの課題に答えを出すための最後のきっかけになるのだろうか。

間に合うかどうかは別にしても、その解答に至るプロセスで避けて通れない局面のひとつに、キューバ革命と知識人の関係がある。あの「パディーリャ事件」<sup>1)</sup>を想い起こすまでもなく、革命政権と知識人の間には、両者の力関係を鮮明に映し出す事件が幾度となく繰り返されてきた。いまやそれらの事件の主人公たちは姿を消しつつあるが<sup>2)</sup>、その一方で革命から半世紀近くが過ぎる間、各事件の顛末を明るみに出す文献が世に出ている。そうした文献は折に触れて再版されたり、新たな資料が付け加わって

の改訂版の刊行も進んでいる。おかげで革命に立ち会った知識人がどのような行動をとっていたのか、かなり克明に知ることができるようになっている。

こうして続々と新しくなる過去＝「歴史」は、共同体の現在にとって、そして未来を考えるとときに厄介な存在である。キューバに限らず、現在が拠って立つ場所でもある過去についての新しい解釈は、常にその共同体の存立基盤に揺さぶりをかけ、場合によっては論争の火種となる。その意味で、半世紀近くのキューバ革命と知識人の関係は、カストロ以降の時代がすぐそこに近づけば近づくほど、ますます騒がしい問題のひとつとなっているのである。

ラファエル・ロハスは2006年に上梓した『安眠できぬ死者たち——キューバ知識人の革命、離反、亡命——』（以下、『安眠できぬ死者たち』）で、この、日々新しさを増す「歴史」に正面から取り組んだ。彼は、共和国期（1902-59）から90年代に至るまでの知識人の振る舞いや葛藤を、膨大な歴史的資料を通じて洗い出し、また、来るポスト・カストロ時代に果たすべき知識人の役割を思考している。スペインの出版社アナグラマが主催する評論部門賞を受賞した本書は、学術的成果であると同時に、キューバの未来にロハス自身がどう関与するのか、その姿勢を表明する書ともなっている。

ここでは、類書を含む近年の研究動向や著者の問題設定などを確認したのち、学術的性質の強い第2章と知識人論とも言える第3章に重点をおいて本書の構想を明らかにしていきたい。

## I 著者ラファエル・ロハス

ラファエル・ロハスは1965年、キューバ島のほぼ中心にあるビジャ・クララ州の州都サンタ・クララに生まれた。ハバナ大学で哲学を学び、ソビエトへの留学経験がある。80年代後半にはキューバ新世代のなかでも注目すべき歴史研究者としてその名が言及される、折り紙つきのエリート

だったという (Santí 2002: 388; Alberto 2005: 257)。しかし、あの「平和時の特別期間」の只中の1991年、キューバを離れてメキシコに亡命する。その後、コレヒオ・デ・メヒコで歴史学博士号を取得し (博士論文のタイトルは *Cuba mexicana: Historia de una anexión imposible*)、現在はメキシコに居を構えている。キューバ史を専門とする歴史学者である。

ロハスには40代前半にしてすでに10冊を越える著書がある。彼がキューバについて発表してきた文章はおおむね、キューバ史、キューバ文学論、そしてキューバの現状をめぐる発言 (提言) の3つに分けられる (Rojas 2003: 7)。評者の手に入ったものを挙げておこう。

キューバ史やキューバ文学を論じたものとしては、『終わりにき島』(1999)と『正典の饗宴』(2000)がある。前者はキューバのナショナリズム形成を知識人の言論をたどって論じたもので、後者では従来のキューバ文学史を野心的に読みかえている。キューバ革命と文学者の関わりを扱った本書もこの二作の延長線上にあると言えるだろう。

『待機の技法』(1998)や『別れの政治学』(2003)は、アメリカ合衆国やメキシコ、スペインなどの雑誌に書いてきた比較的短めのエッセイを収めた時評集で、キューバの現状をめぐる冷徹な分析が主たる内容である。編著者をつとめた『キューバ、今日と明日』(2005)での彼の発言もこの傾向に入れられる。

## II ロハスの仕事とその周辺

キューバ革命と知識人の緊張関係を扱った本には、内幕を暴露したことから、両者の関係を客観的に論じたものまである。ここでは、ロハスの本と関係が近いものを挙げて、近年の流れを踏まえておきたい。

暴露ものの系譜をたどると、古くはエベルト・パディーリャの『忌まわしき記憶』(1989)やレイナルド・アレナスの『夜になるまえに』(1992)、ギジェルモ・カブレラ＝インファンテの『我が<sup>メ</sup>過<sup>ア</sup>ち<sup>ク</sup>キューバ』(1999)、比較的新しいところではリサンドロ・オテーロの『災難は重なる——歴史に

関する個人的省察』(1997)がある。この4冊はともに自伝的な性質を備えているが、革命時の知識人のさまざまな身の処し方を外部のわれわれに明かしてくれた一次資料としても価値が高い。ロハスが本書で扱うテーマも、「ひとつは、1959年の劇的事件に島の知識人が向き合った多様な方法」(p.11)であり、二次資料という違いはあるが、この4冊と似通った性質をもっていると言ってよい。

今世紀に入り、ロハスとほぼ同じような立ち位置からキューバを文化史的な角度から論じたものとしては、エンリコ・マリオ・サンティ(1950～)の『世紀の財産——キューバ文化をめぐる』(2002)がある。キューバ独立百周年の「2002年」にあえて出したということにも注意を払っておきたいが、それはともかくここでサンティは、キューバの文化的な財産として、ホセ・マルティ、ホセ・レサマ＝リマ、カブレラ＝インファンテなどを取り上げて、〈キューバ文化〉について思考している。サンティが扱う作家や作品は、これから見ていくロハスの関心とかなり多くが重なっており、目次をひとつおとり眺めただけでも両書がよく似た体裁になっていることがわかる。本書との比較は今後興味深い作業になってくるだろう。もっともサンティの本は30年近くにわたって書き散らしてきた文章(書評や時評、あるいは講演録)を一冊に編んだもので、エッセイ集のように見えなくもない。一方、ロハスの『安眠できぬ死者たち』は、評者が確認するかぎり、一部をのぞいてほとんど全篇書き下ろしであり<sup>3)</sup>、体裁も学術的な性格が強調されているという違いがある。

ロハスがかかわっている別の二つの仕事も同じ系譜に連なるものと言えよう。ひとつは、やはり2002年に出た『20世紀のキューバ評論』である。700頁以上のこの本は、キューバの文化・思想をめぐる書かれたキューバ人の文章のアンソロジーである。ホセ・マルティ、フェルナンド・オルティス、レサマ＝リマ、アレホ・カルペンティエル、セベロ・サルドウイなどが一堂に会し、キューバの文化思想史を一望の下に収められる仕組みになっている。『安眠できぬ死者たち』は、一次資料たるこの大冊と対

にして読まれるよう意図されているかにも見える。

そしていまひとつは、ロハス自身が編集主幹をつとめ、マドリードで亡命キューバ人によって編集発行されている季刊雑誌 *Encuentro de la cultura cubana* である。雑誌タイトルからもわかるように、国内外のキューバ文化が会おう場を目指したこの雑誌は、1996年夏、『苺とチョコレート』を監督した映画人、トマス・グティエレス＝アレアの特集を皮切りに刊行が始まり、2006年には創刊10年を迎えている。この雑誌の意義については後ほど改めて触れたい。

### Ⅲ 問題設定と構成

本書は、序章のほか全3章立てになっている。構成を紹介する前に、この本の問題設定の核心でもあるキーワード、「記憶の戦争」について説明しておこう。

#### 1 記憶の戦争

革命成就以降、キューバをめぐるさまざまな戦争が戦われた。その中には、たとえば地理上のキューバ島をめぐる戦争（ヒロン海岸での軍事的戦闘）があり、あるいは政治体制に関する戦争（冷戦）がある。そしてロハスによれば、90年代後半以降に繰り返し広げられている戦争は、キューバの知識人が残した遺産をめぐる、言わば象徴的なレベルでの戦争なのだという。

彼が指摘する事例はこういうことだ。60年代から80年代まで、一貫してキューバ政府は革命を支持した知識人（ニコラス・ギジェン、アレホ・カルペンティエル、ファン・マリネーリョら）を顕彰し、一方で亡命した知識人（リディア・カブレラ、ホルヘ・マニャッチ、リノ・ノバス＝カルボら）の価値を貶めてきた。ところが同じ政府が90年代に入ると、亡命はしなかったが必ずしも革命に賛同していなかった作家たち（フェルナンド・オルティス、レサマ＝リマ、ビルヒリオ・ピニエーラら）を顕彰しは

じめる。そして90年代も終わりにになると政府は、かつて革命を批判してきたことが理由で中傷してきた作家たち（セベロ・サルドウイ、リディア・カブレラ、リノ・ノバス＝カルボラ）を顕彰しはじめるようになる。しかしその一方で、カブレラ＝インファンテやエベルト・パディーリャ、レイナルド・アレナスらを国民的顕彰の領域に入れていない（pp.15-16）。

この事実は、だれをキューバ文化の正典として認めるのかを、革命政権が主体的に線引きしてきた証である。秦の始皇帝の焚書と同じように、カストロ体制は文化的な遺産に関する国民の記憶を一元的に支配しようとしている。この戦法が、革命体制の求心力を生む源泉のひとつとなっていることは間違いないだろう。60年代から80年代まで線を引く場所が変わらなかったことは、国民の記憶の支配に体制がそれなりの成功を収めたことを示している。だが90年代以降、その線が動きはじめるのは、それだけ従来の線引きに不満を抱く層が増え、体制側がそれを解消しようと少しずつ枠を広げ、ゆるみつつある求心力に必死に歯止めをかけようとしていることを裏付ける。もちろん下手に広げすぎれば逆効果になる危惧もある。今後、場合によってはカブレラ＝インファンテやパディーリャらをキューバ文学の正典として認める日がきても決して不思議ではないし、あるいは逆戻りして枠を狭める可能性も十分に考えられる。

ロハスは、体制によるこうした記憶の支配の結果、キューバ文化をめぐるのは、その継承者である島内外のキューバ人のあいだで「記憶の戦争」<sup>4)</sup>、すなわち過去をめぐる不和（malestar）が起きているとする<sup>5)</sup>。本書のタイトルにある「安眠できぬ死者たち」というのは、静かに眠れぬ知識人たちのことを指している。そしてその葛藤の解消、すなわち死者の安眠のためには、象徴的な意味での「国民的霊廟」の建立が急務であると説くのである。目的は何か。ロハスは、そうした記憶の不和を解決しておかなければ、キューバに民主化は訪れないと考えているからである。過去の文化遺産を「革命」の内側で一義的な解釈に閉じ込めるのではなく、複数の解釈の場に解放すること。文学作品を美的鑑賞という目的にのみ用い

るのではなく、また知識人を単に理想化することも避け、多様な読解に向けて彼らの生を明るみに出すこと。こうした記憶の民主化こそが、政治的な民主化の前段階に必要な作業だとロハスは見なしているのである。

この目的に資するため、ロハスは本書で、キューバの文化遺産として継承すべき人物群や、彼らの残した作品群をさまざまな角度から照らし出す。キューバ文化の多様さを示し、その地図を描き出すのである。

## 2 構成

ここで目次を掲げ、全体の構成について述べておこう。なお、章の数字は評者が便宜的に付したものである。

### (第1章) 序：

不和にある霊廟  
 革命、離反、亡命  
 エクソダスの備忘録  
 忘却と責任  
 風景の復讐

### (第2章) 知識人たちの駆け引き：

神話への渴望  
 3つの共和国期ナショナリズム  
 ニヒリストと市民  
 ヤヌス症候群

### (第3章) 未完の肖像：

マヌエル・モレーノ＝フラヒナル——過去の新しさ  
 シンティオ・ビティエル——詩と権力  
 ギジェルモ・カブレラ＝インファンテ——歴史に抗する文体  
 エベルト・パディーリャ——離反と愚弄<sup>チョテオ</sup>  
 ロベルト・フェルナンデス＝レタマール——剣をペンに取り

かえて

ヘスス・ディアス——救い出された知識人

ラウル・リベーロ——囚われの詩人

(第4章) 組み立てられる記憶：

耕される領域

記憶の瘤

ポストナショナルの市民性

共産主義後のイデオロギー

政治参加から中立性へ

「記憶の戦争」という問題設定が成された序に次いで、「知識人たちの駆け引き」と題された第2章では、革命前に知識人たちがどのような言論空間に身をおき、国家をめぐるいかなる思想的立場を表明していたのかが示される。20世紀初頭の独立期の国民神話をめぐる議論に触れつつも、主に1940年（マチャド後の憲法制定）から1961年（社会主義革命の宣言）までの言論空間の自由と多様さが綿密な文献調査を通じて明らかにされてゆく。

続いて第3章では、革命と直に向き合った世代の代表的知識人の横顔が、目次からわかるように、革命支持者、反体制派双方から取り上げられている。各作家の伝記的事実と作品とが、常にキューバ史や革命という主題をめぐる論じられる。

最後の第4章は、社会主義圏崩壊以降の時代を扱っている。ソエ・バルデスやレオナルド・パドゥーラ、アピリオ・エステベス、エリセオ・アルベルト、ペドロ・ファン・グティエレスなど新しい世代の作家を紹介しつつ、彼らの語りの戦略を、島内と島外に分かれたキューバ文化の再統合への試みとして分析する。またポスト共産主義のキューバの在りようを解説し、社会主義圏や南米の軍事政権後に採られた和解の選択肢などを踏まえてキューバにおける和解の方法を模索する。

Iで見たロハスの文章の分類にしたがうと、第2章と第3章はキューバ史とキューバ文学論にまたがり、第4章はその二つにさらに政治的発言を溶かしこんだ内容になっている。その点で、全505頁のこの本は、キューバをめぐる著者の思索の、現時点での集大成として位置づけられるものと言える。

#### IV 知識人の革命前史——自由な言論空間とニヒリズム

第2章は学術的論証に主眼をおいたパートである。1940年代から60年代まで自由な言論空間が育成されていたこと、そして同時に、ニヒリズムの浸透していくプロセスが膨大な資料を通じて明かされる。

##### 1 自由な言論空間

ロハスは当時刊行されていた雑誌や知識人を3つのナショナリズムの思想傾向によって大別し、彼らの論争を時代順に跡付けながら、当時の言論空間の特徴を再構成してゆく。カトリック・ナショナリズムの雑誌としては、*Nadie Parecía*, *Verbum*, *Espuela de Plata*, *Orígenes* といった、主にレサマ＝リマが関わっていた雑誌が分析され、共産主義ナショナリズムからは *La Gaceta del Caribe*, *Nuestro Tiempo* などが、そして、リベラル・ナショナリズムからは *Diario de la Marina*, *Ciclón*, *Bohemia* などの雑誌が分析の対象となっている。これらの雑誌を舞台に繰り広げられた論戦（たとえばカトリック派と共産主義派間の論争や、リベラル派とカトリック派間の論争、革命直後の論壇の再編成のプロセス）が、場合によっては細かすぎるほどミクロなレベルで叙述され、当時の知的領域における知識人の交流が伝えられる。

著者の目的は、これら諸雑誌の思想傾向に大まかな境界線を引いて整理し、今日のわれわれに見取り図を提示することにあるだけではない。むしろそれより大きな目的として、3つに大別できるナショナリズムそれぞれが、相互に意志の疎通が可能なかたちで平和的な共存関係にあったことを

強調している（たとえば p.106）。

ロハスの解釈によれば、こうした複数意見の醸成と共存を可能にしたのは1940年の共和国憲法である。バティスタが大統領に就任して制定されたこの憲法を皮切りに、キューバには市民的公共心が根付き、多様な国家観の共存が可能になったのだという。また、1940年憲法の制定によるキューバの近代的民主化は、政治的局面における社会性の育成など自由な言論空間を形成しながら進み、この環境がのちに、多様な国家観の諸勢力を結集したカストロ革命を下支えするのである。カストロらが革命運動に着手したときの最初の政治行動が、当の憲法を制定したバティスタを憲法違反で告発することだったという事実が、これを裏付けている（Rojas 1998:16）。1959年の革命が、複数のナショナリズムを広く招き入れ、民意の支持を受けて成立したものだという歴史的正当性が確認される。

と同時にロハスは、1961年のホルヘ・マニャッチの発言に論及し、同じ年にカストロらが明らかにしたマルクス＝レーニン主義を基盤とする政策への転換は1959年の革命精神および国民への二重の背信であり、歴史的には正当性を欠いたものだ、とマニャッチが疑義を表明していたことを開陳する（pp.194-195）。こうして1959年と1961年以降との溝が際立たせられることになる。

## 2 ビルヒリオ・ピニェーラとニヒリズム

革命以前、キューバの知識人のあいだには国家の自立を達成しえぬ挫折感、政治忌避、そしてニヒリズムが芽生えていた。このニヒリズムが20世紀半ばにキューバの知的空間を侵し、一方に生まれつつあった社会性の放棄をうながして全体主義政権をもたらした、というのがロハスの見方である。革命政権樹立後、カストロやゲバラへの一種の白紙委任状の提出ともいえる知識人たちの盲従は、このニヒリズムが背景にあるという。

そのキューバ的ニヒリズムをもっともよく体現した主人公として描き出されるのは、ビルヒリオ・ピニェーラおよび彼が主宰していた文芸誌 *Ci-*

*clón* である。

50年代半ばにキューバの知的空間が経験する政治からの退却は、1955年から1957年までホセ・ロドリゲス・フェオとビルヒリオ・ピニエーラが刊行していた雑誌 *Ciclón* に凝縮されている。シュールレアリスム、実存主義、現象学、精神分析、戦後のユマニズム的観念論への接近……そして（中略）同性愛への公然たる擁護からも明らかなように、この刊行物が文学的地方主義やブルジョア・エリートのカトリック的偽善に対抗して発揮した道徳的反乱は、国の政治課題を前にするときの彼らの怠惰や軽薄さとは対照的なのである。（p.151）

*Ciclón* は、カトリック派ナショナリズムの大御所レサマ＝リマが主宰する穏健な文芸誌 *Orígenes* に対抗してピニエーラが出したリベラルな前衛文芸誌である。しかしピニエーラの思惑とは裏腹に、文学的価値は美的目的によって文学の内部でのみ論じられるべきとする *Ciclón* の姿勢や政治からの逃避は、*Orígenes* と同質だとロハスは看破する（p.153など）。

さらにロハスは、ピニエーラばかりでなく、ホルヘ・マニャッチ、フェルナンド・オルティスら先行世代の知識人にも触れ、彼らの政治への幻滅のプロセスもたどり、知的空間に広く行き渡るニヒリズムの様相をいくつかの事例とともに明らかにしている。とくにピニエーラをめぐっては、共産主義派の雑誌 *Nuestro Tiempo* 上で彼が「敗北者の思想」の主だと批判された経緯（p.138）や、ピニエーラ自身による「ニヒリズム的嘆き」が縷々引用され（p.154）、彼の非政治的姿勢が際立たせられている。さらに、革命後に出た最後の *Ciclón*（1959年3月）で、政治に無関心だったはずのピニエーラが一転、革命礼賛の文を寄せる節操の無さまでが明るみに出される（p.158）。

ロハスはピニエーラの姿勢を、「政治を汚れたものと関連づける、古臭い情緒的ためらい」（p.164）と断じ、以降の世代の作家たち——カブレ

ラ＝インファンテ、セベロ・サルドゥイ、エベルト・パディーリャら——がこの振る舞いを継承することになったと見ている。こうしてロハスは、「長きにわたるニヒリズムの培養からしか、1959年と1961年の間に瞬時に建設されたあの革命秩序に対する多くの知識人の謎めいた降伏は説明されえない」(p.164)と、知識人の全面降伏の背景を説明し、この行為は、「ニヒリズムという罪に対する集団的贖い」(p.165)だったと結論づけるのである。

このようにまとめると、知的空間をニヒリズムで覆い尽くしたピニエーラらに対して相当辛らつな批判が書き連ねてあるように感じられるかもしれないが、叙述は主観を抑えた淡々とした筆致で進み、特定の雑誌や人物に責任を負わせようと杓子定規に断ずる姿勢は微塵も感じられない。ロハスの分析は多種多様の論戦に立ち寄り、ストーリーの単純化を容易には許さない濃密な語りの構造になっている。

ただ欲を言えば、俎上に載せるものをマニフェストや批評、エッセイ、心情告白的内容の詩だけに限らず、小説などフィクション作品にも言及して欲しかった。たとえばピニエーラには短篇・戯曲作家としての立場があり、*Ciclón*に掲載された作品をみると、表立っての彼の発言とは矛盾するような政治的意図が込められているように読めるものも少なくない<sup>6)</sup>。評者が文学畑にいるからこそ感じたことかもしれないが、文学者が書いたノンフィクションだけをとりあげて一概に彼らの姿勢を論じ切る手法には、やや疑問が残った。

## V 知識人論——反面教師と理想像と

ロハスは第3章で文学者7人のプロフィールを個別に追いながら、知識人と革命との距離の具体的な事例を示している。盲従（フェルナンデス＝レタマール）、面従腹背（モレーノ＝フラヒナル）、反目（パディーリャ）など、いくつかのタイプをとりあげつつ、ロハスの考える理想的な知識人像を提示する。7人の中では、マヌエル・モレーノ＝フラヒナル、ヘス

ス・ディアス、カブレラ＝インファンテを語る時、ロハスの眼差しは親密で愛情に満ち溢れ、第2章で見た俯瞰的立場とは対照をなす。そもそも本書は「師にして友人である」モレーノ＝フラヒナルとヘスス・ディアスの両名に捧げられ、また、序章には、やはり親交のあったと思しきカブレラ＝インファンテの文章がエピグラフとして引かれている。本書の成立にこの3人が特別な立場で寄与していることが、ロハスの筆致の変化と関係しているのだろう。ともあれここでは、反面教師として登場させるロベルト・フェルナンデス＝レタマール、継承すべき立場として尊重しているヘスス・ディアスを見てみよう。

ロハスは、詩人でもあり批評家でもあり、また文化官僚として革命のスポークスマンでもあるフェルナンデス＝レタマールを、左翼系知識人のジレンマを体現する好例と見ている。抒情派の詩人として50年代初めにデビューしたフェルナンデス＝レタマールは、革命に参加しなかったことから罪悪感に苛まれ、贖罪の知識人になる。カストロ、ゲバラを礼賛する文章を書き散らし、知的領域の主導権を政治家に明け渡した60年代から70年代は、彼のそもそもの知的基盤である西洋的な美や知を段階的に放棄し、反西洋的、反知性的な態度を鮮明にしていった過程だったと分析される。1971年のキャリバン論の発想には一定の評価を与えるもの（pp.304-305）、ボルヘスやバルガス＝リヨサラを一貫して否定するフェルナンデス＝レタマールはやはり革命体制独特の非妥協的姿勢の典型であり、国家権力にすべてを捧げた政治的パンフレット作家だと結論づけられる。

ロハスがなにより問題にするのは、フェルナンデス＝レタマールが自分の文章の読み手として、キューバの一般読者や、島内外の知的空間を形成する人たちではなく、もっぱら政権中枢のエリートのみを選び出していることである。閉じられた、もはや言論空間とは言えない場所で自足し、権力におもねる御用知識人の姿が一切の皮肉なしに描き出されてゆくとき、その存在の痛々しさはひときわ強調される。

これとは対照的に登場するのがヘスス・ディアスである。1941年生まれ

のヘスス・ディアスはバティスタ政権打倒運動に身を投じるどころから革命と積極的なかわりをもっている。作家としては1966年に短篇集『困難な歲月』が「革命というテーマを文学的に扱った模範的作品」(Casañas, Inés, y Jorge Fornet 1999: 53)と評価され、カサ・デ・ラス・アメリカス賞(短篇部門)を受賞し、革命世代の正統的作家として歩みはじめた。

その後、革命への忠誠を誓いながらも、雑誌 *El Caimán Barbudo* や *Pensamiento Crítico* の編集者として文学芸術に関しては自律的見地を求めている。「パディーリャ事件」の発端となる論考が *El Caimán Barbudo* に掲載されたとき、同誌の編集長をつとめていたのはディアスだった。だが後年、自らが関わった映画の検閲や小説の発禁などを経験し、壁崩壊に前後してベルリンへ渡る。

ディアスが島外で明らかにした政治的な立場は、アメリカ合衆国に経済封鎖の解除を求め、同時にキューバにはカストロ退陣を迫るものだった。ディアスのこの立場は、経済封鎖に限らずカストロ暗殺すらもくろむマイアミの亡命キューバ人コミュニティの論法とは立ち位置が180度異なり (p. 319)、また当たり前のこととして、島からも追放の憂き目に遭う。「愛国的左翼」(p. 319) というラジカルな姿勢は、マイアミにもハバナにも居場所を見つけられず、ディアスは第三の土地を選択することを余儀なくされる。それが1995年から2002年に急死するまで住むことになるマドリッドである。ここで想い起こしておきたいのは、ロハスのもう一人の「師にして友人」モレーノ＝フラヒナルが死に場所として選んだのがマイアミだったということである。ロハスによれば、先人たちの眠るマイアミで死ぬことは、モレーノ＝フラヒナルにとって、学術的経歴からも真っ当な系譜に連なることを意味していたという (pp. 222-228)。

こうしてディアスはマドリッドを拠点に新たな言論空間の創設に取り組んだ。その結果が、後にロハスも参加する雑誌 *Encuentro de la cultura cubana* である。ロハスは引用していないが、同誌創刊号にはディアスの抱負が高らかに宣言されている (*Encuentro de la cultura cubana*,

verano de 1996, núm. 1 : 3)。

雑誌 *Encuentro de la cultura cubana* は、最重要の目的として、国の現実を検討に付すための開かれた空間でありたい。わたしたちのページには、島に暮らすキューバ人からも、それ以外の国々に暮らすキューバ人からも寄稿してもらうことになるだろう。言うまでもないが、わたしたちの国やその状況に関する外国の知識人からの論考も掲載されるだろう。(中略) *Encuentro de la cultura cubana* は、キューバあるいは亡命先のいかなる政党とも政治機関ともなんのかかわりももっていない。(中略) *Encuentro de la cultura cubana* は、矛盾したり、場合によっては対立するさまざまな観点に開かれており、また、論争を受け入れ、それを活発化させるだろう。それを行いながら、わたしたちの国にあって欲しいと願う複数性の社会 (la sociedad plural) を前もって形にしているのである。(傍点引用者)

「開かれている」ことや「複数性」へのディアスの執着は、キューバもマイアミもどれほど閉じられた単色の空間なのかを裏書き、また異論の入る余地を許さないという点ではお互い双子のような場所であることを改めて気づかせる。ちなみにディアスはマドリードで、ディアスポラのキューバ人による社会科学系の出版社 Colibrí 創設にも力を貸し、さらなる言論の場の確保に努めた。マイアミでなくマドリードへ、というキューバ知識人の別の地図がここに築かれたのである。

自分の意見に賛同する者とはしか対話せず、閉じられた言論空間にこもるフェルナンデス＝レタマールと、複数の意見が共存する知的領域を切り開いたヘスス・ディアス。ロハスはディアスを「キューバにおける民主主義への移行期の、もっとも重要な公的知識人 (intelectuales públicos) のひとり」(p.323)と呼んでいる。日本語にしにくく、まただからこそ論争の種になる「公的」というこの表現の内実をここでの論旨に依拠して解釈

すれば、ためにする批判ではない言論の場の構築に寄与する人のことを指している。<sup>オフィシオ</sup>仕事上の利害でのみ（つまり「オフィシャルな」立場から）行動するフェルナンデス＝レタマールと対置させたとき、ディアスの「公共性」のもつ広がりや、より鮮明になってくるのではないだろうか。このように見てくると、ディアスと同世代人でありながら、経歴が奇妙にすれ違うアレナスの亡命以降の振る舞い（*Mariel* 誌創刊、カストロへの公開質問状など）を、ディアスのこの「公共性」に則して吟味してみたいくなるのだが、この点については稿を改めて論じることにはしたい。

### おわりに

ロハスはこれまでの著作を通じ、島内外のキューバ人の対立を解消し、島外に離散したキューバの文化を公平に受け入れる環境を島の中に整え、そのもとで統治される新しい共同体のありかたを探っている（Rojas 2003:7-8）。本稿で見てきたように、ロハスは本書でもそうした未来に向けての第一歩となるよう半世紀前の歴史的資料を掘り起こし、幾多の論争や百家争鳴の思想的立場の系譜に光を当てる。政治的パンフレットのように教条的な観点から論ずるのではなく、論争の様相を丁寧に再現することを追求している。そこからは、「過去」を複数の解釈に解放し、それを通じてキューバをめぐる記憶の共同性を打ち立てようというロハスの目論見が浮かび上がってくるのである。

もっとも、その共同性について留意しておくべき点もある。ロハスは本書でとりわけ西洋的な知を基盤にした作家を中心に取り上げ、それらの作家を西洋の作家と比肩させていく手続きをとる。たとえば、モレーノ＝フラヒナルをブローデルと、カブレラ＝インファンテをブルーストと、シンティオ・ビティエルをエズラ・パウンドと並べる。ここには、キューバの文化をあくまで西洋思想の範疇でのみ解釈するという著者の強い意志がむき出しになっている。ここをどう読むかで、本書の受け止め方は変わるかもしれない。評者としては、キューバの未来を思考するための足がかりに

するとき、このラインアップや手法では偏りがあるように感じたことを指摘しておきたい。

著者は、1959年革命の歴史的正当性は認めつつも1961年以降のカストロ独裁体制には反対し、それを結果的に呼び込んだニヒリズムと、知的空間を政治家に明け渡した知識人を批判する。歴史的にはキューバと地続きのマドリードで共同作業としての知的空間を確立したヘスス・ディアスの立場を尊重するところは、公共性—共同性を放棄してはならぬという、知識人に向けた著者のメッセージとして読むことができるだろう。その著者も、キューバ革命とは切っても切れないメキシコという土地に居を定めていることも改めて確認しておきたい。知識人の言論を検討しつつ、それを現在（われわれ）に引き寄せ、未来へつなげる思考方法は彼のこれまでの著作を貫く姿勢であり、その集大成である本書は、ラテンアメリカ政治・思想・文学と向き合う際に、必ず参照されるに値する一冊である。

\*Rafael Rojas, *Tumbas sin sosiego: Revolución, disidencia y exilio del intelectual cubano* (Barcelona: Anagrama, 2006), 505 pp.

## 註

- 1) カストロ革命体制が行った言論弾圧としてもっとも有名な事件。詩人エベルト・パディーリャは、みずからの東側諸国滞在の経験を踏まえ、ギジェルモ・カブレラ＝インファンテの『三頭の淋しい虎』（1964年、ビブリオテカ・ブレーベ賞受賞作）がキューバ文学界で等閑視されていることに疑問を呈した論評を雑誌 *El Caimán Barbudo* に発表したり、キューバにはびこるスターリン主義的風潮を告発する発言を行い、政権から不興を買っていた（1967年）。翌68年、パディーリャの詩集『ゲームの外で』は作家協会（UN-EAC）主催の文学賞を審査員の満場一致で受賞したが、協会側は革命に対するパディーリャの懐疑的姿勢を強く非難した。この段階ではパディーリャによる革命体制批判は国内の知識人のあいだで反響を呼んでいる事件にすぎなかった。しかし、砂糖キビ1千万トン生産計画の失敗などを背景に、政権側は知識人層への言論統制を強め、1971年、パディーリャをおよそ1ヶ月間拘束、その後公開で「自己批判」を行わせた。このニュースが国際的に伝播すると、カストロ支持派だった西側知識人はいっせいに革命批判に転じ、また

- 一方で70年代のキューバの文化政策は硬直化を招く結果となった。パディーリャはその後、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの仲介により、1980年アメリカ合衆国に亡命した。(Padilla 1968, 1989, 1998; Casal 1971)
- 2) エベルト・パディーリャは亡命先のアメリカ合衆国で2000年没。また、ギジェルモ・カブレラ＝インファンテは2005年、やはり亡命先の英国で没した。
  - 3) 『安眠できぬ死者たち』第3章の「マヌエル・モレーノ＝フラヒナル」の項については、ほぼ同じ内容のものが掲載済みである (Rojas 2003: 14-19, 137-141)。
  - 4) ちなみにロハスは、“Guerras de la memoria”と題するエッセイを発表している (Rojas 1997: 46-48)。本書執筆の予備的な省察と考えられる。
  - 5) ここにはフロイトの論文「文化への不満」が踏まえられている。
  - 6) *Ciclón* にはピニェーラのフィクション作品 (短篇、戯曲) が7篇掲載されているが、ロハスは言及を避けている。

#### 参考文献

- アレナス、レイナルド. 1997. 『夜になるまえに』安藤哲行訳、国書刊行会。
- フロイト、ジークムント. 1969. 「文化への不満」浜川祥枝訳 (『フロイト著作集 第3巻』、人文書院)、431-496ページ。
- モレーノ・フラヒナル、マヌエル. 1994. 『砂糖大国キューバの形成：製糖所の発達と社会・経済・文化』本間宏之訳、エルコ。
- ラテル、ブライアン. 2006. 『フィデル・カストロ後のキューバ』伊高浩昭訳、作品社。
- Alberto, Eliseo. 2005. *Dos Cubalibres* (México, D.F.: Océano).
- Asociación Encuentro de la Cultura Cubana, *Encuentro de la cultura cubana*, <http://www.cubaencuentro.com/es> (2007年3月8日)
- Arenas, Reinaldo. 1992. *Antes que anochezca* (Barcelona: Tusquets).
- Cabrera Infante, Guillermo. 1999. *Mea Cuba* (Madrid: Alfaguara).
- Casal, Lourdes. 1971. *El caso Padilla: Literatura y Revolución en Cuba: Documentos* (Miami: Universal).
- Casañas, Inés, y Jorge Fornet. 1999. *Premio Casa de las Américas: Memoria 1960-1999* (La Habana: Casa de las Américas).
- Ciclón*, vol. 1-4, 1955-1959, La Habana.
- Moreno Fragnals, Manuel. 1995. *Cuba/España España/Cuba: Historia común* (Barcelona: Grijalbo Mondadori).
- Otero, Lisandro. 1997. *Llover sobre mojado: Una reflexión personal sobre la historia* (La Habana: Letras Cubanas).

- Padilla, Heberto. 1968. *Fuera del juego* (La Habana : Unión de Escritores y Artistas)
- . 1989. *La mala memoria* (Barcelona : Plaza & Janés).
- . 1998. *Fuera del juego : Edición conmemorativa 1968–1998* (Miami : Universal)
- Piñera, Virgilio. 2002. *Cuentos completos* (La Habana : Ateneo).
- Rojas, Rafael. 1997. *El arte de la espera : Notas al margen de la política cubana* (Madrid : Colibrí).
- . 1998. *Isla sin fin : Contribución a la crítica del nacionalismo cubano* (Miami : Universal).
- . 2000. *Un banquete canónico* (México, D.F. : Fondo de Cultura Económica).
- . 2003. *La política del adiós* (Miami : Universal) .
- . 2006. *Tumbas sin sosiego : Revolución, disidencia y exilio del intelectual cubano* (Barcelona : Anagrama).
- Rojas, Rafael(coordinador). 2005. *Cuba hoy y mañana : Actores e instituciones de una política en transición* (México, D.F. : Planeta).
- Rojas, Rafael, y Rafael Hernández(eds.). 2002. *Ensayo cubano del siglo XX : Antología* (México, D.F. : Fondo de Cultura Económica).
- Santí, Enrico Mario. 2002. *Bienes del Siglo : Sobre cultura cubana* (México, D.F. : Fondo de Cultura Económica) .